

新春対談

俳優 梅津 榮 さん
都留市長 都倉 昭 二

梅津 榮さん



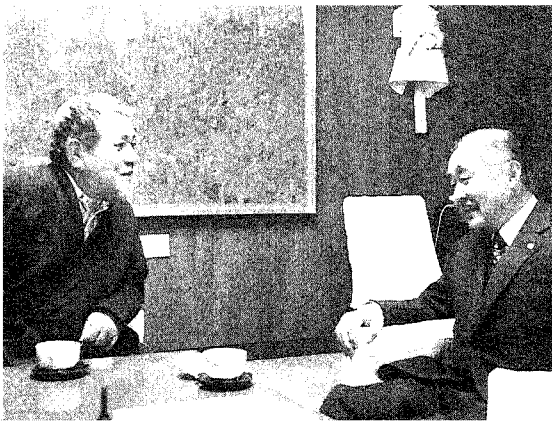
都倉 市長

市長 本日は、お忙しいところを

都留市においていただきましてありがとうございます。新年早々先生の個展が本市で実現することになり、大変楽しみにしています。

ところで、こちらにおいていただくのは幾度目でしょうか。

梅津 今回で二回目です。一昨年の暮れに、増田誠美術館に伺いました。過去に友人を通じて増田画伯の作品を拝見する機会があったんですが、先生の人間味あふれる画風に感動しました。以来、機会をとらえては画伯の作品に触れ、ますます人柄に共鳴するようになってきました。そして今回、増田画伯



が縁で私の「字展」を開催できることになり、本日は、作品の制作と書き初めを兼ねてお伺いした次第です。

市長 今回の増田誠美術館での作品展は、「字展」となっており、ポスターの中にも、「書じゃなくて、字を書きました」とあるんですが、なぜ「書展」ではないんですか。

梅津 私は常日頃、人生は、飾ることがない、ありのままの人間味を出した生き方をしなきゃいけないと思っています。「字」は、ありのままの自分の「字」を書くもので、「書」は「字」に着物をきせて飾ったものというふうを考えています。増田画伯の作品に波長が合ったといえますのは、パリの下町の人々の生活をありのままに情緒豊かに描いておられる、温かい画風に感動したからです。それから、もう一つ、増田画伯は床屋のせがれ、私は下駄屋のせがれと二人とも職人の家庭に育ち、生い立ちが共通していることにも、大変親近感を覚えているんです。

市長 増田画伯と梅津先生の接点というものが理解できたような気がします。そこで、今回の作品展

の制作主題はなんですか。

梅津 増田画伯への憧れとかほとばしる感情を主題に、キラッと光る庶民の日常生活を「字」で表現できたらいいと考えています。もともと私は、正式に「字」を勉強したことはないんです。ただ、俳優としての職業柄、ここまでするには凌ぎを削って、さまざま体験をしておりますから、人生の経験や年輪で書いていただけです。

市長 梅津榮さんといえば、俳優として、テレビのドラマや映画で、活躍されておりますが、最近の俳優としての活動や役に對する主張というふうなものについてお聞かせ願えませんか。

梅津 つい一カ月前までは、三越劇場で淡島千景さんや菅井きんさんと共演しておりましたが、今は、『侍探偵事件簿』という時代劇のドラマで、高橋英樹さんと共演しています。私は、役に大小は無いと考えてます。人気があるとか、主役が上だとかといったことではなくて、俳優としてそれぞれの役をこなして一つの作品が出来上がるのですから、今の芸能界は、人気があるとかはややされ、

俳優として、人間として上のようになつたように勘違いしている人が多すぎるような気がします。

私は驚いているんですよ。都留という街が、増田画伯の芸術性を早々と発見して、多くの作品を收藏して、その上、増田誠美術館をつくってしまつたということは、素晴らしいことだと思います。その上、公立大学があり、昨年は文化ホールが完成し、今度は博物館の計画があるそうですが、人口わずか三万五千の市で考えられないですね。都留市の文化水準というか、教育文化に對する市民の情熱が感じられますね。

市長 増田画伯は、昭和三十二年にフランスへ渡り、以来、人間性あふれる独特の作風を確立され、素晴らしい作品を制作されるとともに、数々の栄えある受賞に輝いております。この間、定期的に日本へ戻り作品展を開催されているんですが、その度に都留へ立ち寄られて多くの作品を寄贈してくれました。その際、画伯の作品を展示する場所を、という話が出まして、画伯は、どこか市の建物の一角でいいからおっしゃったんですが、百五十点にもおよぶ画伯の作品をきちんと保存するためには、ある程度のもので、ということになりました。増田誠美術館が実現したんです。

梅津 実は、私、増田画伯に直接お会いしていません。私も各地で世界の素晴らしい作品を見ていますが、画伯の芸術性は日本で

もっと評価すべきだと思うんです。これは、しっかりした画廊主に聞いた話なんです。いま日本で、後世に残るような絵かきさんは、ほとんどいないそうです。増田画伯は、言葉もなんにもわからない、パリという日本と違った土地で、あれだけのものを描けて評価を受けたという事は、素晴らしいことだと思います。日本人で、向こうに行つてあれだけの評価を受けた人は、そうはいないですからね。

市長 ありがとうございます。これからは、都留市では、いつでも増田画伯の作品が鑑賞できるという事を大事にしながら、芸術文化の発信地となるよう努力していきたいと思っております。そのよなことから、昨年、文化ホールのオープンを記念して開催した加倉井和夫展等の我が国を代表する作家の企画展をはじめ、今回の梅津先生の「字展」のような個人的な作品展を積極的に開催していくと考えています。それから、増田画伯を囲む人たちもすばらしい方が大勢おられます。特に、小林亜星先生は画伯を通じて知ったわけですが、市民愛唱歌も作曲をしていただきました。そして、今回もこのように梅津先生と知り合うことが出来ました。今後も、教育文化都市を目指して、個性的な都留市のまちづくりを進めていきたいと考えています。

梅津 がんばってください。期待しています。